

冬・斷章

東條 環

風見は益々癩が強くなり
蠅は日毎、木乃伊の
首輪を飾る

×

黒猫は研ぎ澄まされた
メスを啜へて
眞闇の中に蹲った。

私は、もはや動けない鼠であつた。

掲載誌：「山桜」昭和九年十二月号

(詩)